

十文字学園創立者 十文字 こと

# 夢の実現から未来へ

没後六十年記念

身をまかせたへ  
〜らき〜て

世の中に

立ちてかひある  
ひたひた生きる心



花井裕子 書

自彊不息

十文字六巻

御揮毫

一九二二年の創立以来、一〇〇周年をめざして  
社会の変化に柔軟に対応できる女性の育成を行っています。



理事長 十文字 一夫

十文字学園は、創立者である「十文字こと」の「教育を受けた  
と思う女性がひとりでも多く学べる私立学校を作りたい」とい  
う強い願いのもと、東京女子高等師範学校時代の友人と共に、一  
九二二（大正十一）年に東京の巣鴨の地に設立され、九十余年に  
およぶ歴史をもっています。本学の建学の精神は、学園歌「身を  
きたへ 心きたへて 世の中に たちてかひある 人と生きな  
む」のなかに込められています。自分自身の生きがいを持ち、自  
分の力で世の中の役に立てる身心の健康な女性を育てたいと願う  
創立者の精神は、現在も脈々と受け継がれています。

今後も「自ら強めて息まず」の精神、生き方を守りつつ、社会  
の変化に柔軟に対応して、十文字にしかできない女子教育の実現  
をめざしていきます。

# 目次

挨拶	……………	理事長	十文字	一夫	1
創立者十文字こと氏のこと	……………	第二代理事長	十文字	良子	4
こと先生没後六十年記念―生涯をつらぬく「学び」の姿	……………				6
創立二五周年記念日式辞	……………	初代理事長	十文字	こと	7
(昭和二十二年二月一五日)					
八十過ぎての御受講	……………	大妻	コタカ	先生	9
栄養生の大先輩	……………	佐々木	理喜子	先生	10

解説・こと先生の栄養学勉学について……………11

こと先生の教えを語る・卒業生座談会……………13

十文字学園の沿革……………22

十文字こと先生・その生涯……………24

『十文字こと先生傳』より……………32

力の修養 回顧二十年

学園歌……………36



# 創立者十文字こと氏のこと

学校法人十文字学園第二代理事長

## 十文字 良子



十文字学園の創立には女子教育に対するいろいろの目的があったことはいうまでもありませんが、根本精神、即ち信条は「身心の健康な女子を育成する」ということであります。国民の体位向上こそ個人の幸福、国家の隆昌の基であり、それには国民の母である女子の体格を改良するのが第一であるとして、そのために自衛術を正課としてとりあげたのであります。「自衛」という文字は自らを強くするというのではなく、「自強不息」すなわち「つとめてやまない」ということで、何事によらず一たび大きな覚悟をもつて決行した以上、どんな困難にぶつかってもあくまでやりぬくということ、所謂「ようじん努力する」ということなのです。易経に「天行健君子以自強不息」という句があります。

天の運行は健全のもので一瞬といえどもやむときなく、運行をつづけておる。われわれ人間も天の運行のごとくしようじん努力して健全であらねばならぬという意味であります。これが建学の精神であり、五十年間本学に学び巣立った一万余の卒業生の心のよりどころであると信じます。

文華高等女学校、十文字高等女学校、戦後の新制高等学校、そして短期大学と時代、名称、内容に夫々のちがいがあってもこれらの卒業する人達には終生必ずやこの共通した心情が通い合っていくものと信じます。これが本校の歴史に貫いて流れる校風であり伝統であります。特別目立つ華々しさはありませんが、筋の通った堅実な実のある歩みをつづけているこの卒業生が

校歌の通り世の中に役立ってガッチリと日本の底力となつてゐることに私は大きなほこりを感じるものであります。創立より半世紀——人の一生にも近い五十年の間には幾多の出来ごとがありました。その都度学校当局幹部はじめ、教職員、ご父兄、卒業生其他各位の一致したご尽力によりそれをのりこえて今日の発展を見るに至りましたことは、全く皆様のご支援の賜物と感謝にたえないところであります。特に第二次世界大戦にて戦災を受け、校舎の全部を烏有に帰し、生徒も四散した時に当りましては、皆様からおよせ頂いたご厚情をよりどころとして、学園は再起したのであります。我国は民族に内在する伝統と絶大なエネルギーによつて、立派に立ち直り、経済の発展の勢にのつて大國となりましたが、今日のようにゆれ動く世界情勢の下においては決して安泰ではあり得ぬのであります。特に教育系に問題は山積しています。それを思います時、私共は創立五十周年をむかえるにあたり、学園教育の根本的意義を十分に認識し、覚悟を新たにして、新時代の要望にこたえねばならぬのであります。幼稚園、

中学校、高等学校の教育実績をあげることはもとよりであります。現在の短期大学の家政科と幼児教育科を模範的に充実させ、ひいては広い視野と高い理想を持つて国際的感覚を身につけるところの総合短期大学として教育研究の裾をひろげ、そしてその上に、もう一層の真理の殿堂をも打ち立てて、各々の分野からひろく社会の幸福に寄与することを念願するのであります。

たとえそれが今は困難であろうとも、この目的に向つて自彊不息の歩みをつづけるならばこの志は必ずや達成されるものと堅く信じています。

東京女子高等師範学校がお茶の水女子大学として発展的解消の日に、学園創立者のこと先生が同窓生総代としての言葉の中に「過去の正しい良い歴史と伝統の反省の上に立つてこそ、正しい進歩がある。」とのべられたことを心として創立の悲願である身心健やかな世の中に役立つ女性を育成し、益々世に送り出して五十年の磐石たる歴史と、伝統の上に、一層の発展を期して社会のご期待にそいたい覚悟であります。

「十文字学園五十年史」（昭和四十七年出版）より

## こと先生没後六十年記念―生涯をつらぬく「学び」の姿

一九二二（大正十一）年二月一日に開学した学園は、二〇二二年に一〇〇周年を迎える。創設者である十文字こと先生は、開学した大正時代から、一九三五年に新校舎を建て学校名を「十文字高等女学校」として再スタートした戦前期、さらに戦時期を体験し、戦後復興を成し遂げ、一九五五年に亡くなっている。こと先生の蒔いた女性の教育への思いは大きく成長し、現在十文字学園は、幼稚園、中学校、高校、大学、大学院へと女性の教育機会を拡大し、さらに職業進出による女性の社会での活躍へと広がりを見せている。

今年はこと先生没後六十年にあたる。それを記念して、改めてこと先生の教えについて、また生涯を通した学びの姿勢について、『十文字こと先生傳』（昭和三十六年出版）に掲載されている三篇の文章により振り返ってみたい。一つは、戦後一九四六年に学園が二五周年を迎えた「記念日式辞」である。当時こと先生の戦後復興から発展にかける思い、校歌の実現にむけた決意がうかがえる。二つは、生涯にわたって自ら学びの姿勢を貫かれたご様子が、女子教育にかけた同時代の女性である大妻コタカ先生（一八八四―一九七〇 現在の大妻女子大学設立者）によること先生への追悼文「八十過ぎでの御受講」に示されている。三つは、こと先生は晩年に若い人たちと共に栄養学校に在籍しているが、共に学んだ佐々木理喜子先生による「栄養士の大先輩」の文章からこと先生の学ぶ姿勢をとらえた。栄養士資格が誕生した当時の状況については「解説」で詳しく述べている。

最後に、こと先生から直接指導をうけた卒業生による座談会を通して、こと先生の教えを振り返る。

## 創立記念日式辞（昭和二十一年二月十五日）

初代理事長 十文字こと

今日は、本校の創立を、第二十五回目に迎える記念日であります。

その初めは、校名を文華高等女学校と名乗り、今は焼けましたが、十文字幼稚園と道一つ隔てて向かい合って建てられてあった、豊島実践女子高のあの校舎が、その当時の文華高等女学校の建物でありました。最初は、今ここに居られる戸野哲夫先生の御母堂と斯波安先生と私の三人が、その創立者でありましたが、昭和九（一九三四）年十二月、私一人でその全責任をお引き受けいたしました。（中略）

皆様の教育の家となったあの学校の校舎は、その当時新しく求めた土地四千坪近い敷地の上に新築いたしましたのであります。（18ページの写真参照）

この校舎の構築並びに諸設備について一言申しておきます。（中略）昭和三（一九二八）年の夏<sup>\*</sup>、世界教育大会がスイス国のジュネーヴにおいて開催せられたのを機会に、私も出席者の仲間入りをして、倅と末の娘とを連れて旅だったのであります。

まず朝鮮の京城を振り出しに、シベリヤ鉄道によりロシアを初めとして、ポーランド・チェコスロバキヤ・チユーリッヒ・オーストリア・スイス・イタリア・ドイツ・オランダ・ベルギー・スエーデン・デンマーク・フランス・英国及び米国の各州を旅行いたしましたのであります（写真）。その節、その国々の模範学校と称せられている大学から、中等学校・小学校・幼稚園等々、世界大戦後における教育方針、教育の実際、建築物・諸設備等につき見学いたしましたのであります。かくして帰朝後、日本においても、北は樺太・北海道から南は九州・四国・中国地



帰朝報告、洋装姿のこと先生

方を旅行して、その地における目ぼしい学校を参観して後、わが学校の建築にかかったのでありました。どうしても設備の整っているのといかないのでは、教育上大いに影響のあることを痛感いたしましたので、わが学校も、自分の力の及ぶ限りを尽くしたのであります。建築着手後一か年にてやっと竣工いたしましたので、昭和十一（一九三六）年一月に、旧校舎から新校舎に移ったのであります。

そうして、校名を『十文字高等女学校』と改めました。皆さん御承知の通り、この私財と心根とを注いだ校舎と諸設備は、昭和二十（一九四五）年四月十三日の戦災に罹って全焼、今日では広い焦土の上にその建物の残骸が哀れにも淋しく残っているばかりであります。この時に当たって秋葉先生を初め、今日ここに御列席の諸先生方には御自分の危険をよそに、万難を排して、学校のため、教育のために御奮闘くださいました。そのために、学校を閉鎖することなく、直ちに授業を始めることができました。もつとも教育の場所として校舎をお貸し下さいました、女高師附属高女並びに聖学院中学校の主脳部の方々の御厚意にもよることでありまして、この点に対し深く感謝を捧げる次第であります。（中略）

この上は事情の許す限り、また私どもの力の限りを尽くして学校復興のことに尽力いたし、なるべく早く旧に復させたいと念願いたしております。皆さんも、どうか、今日を記念すると同時に、学校復興のためにおつとめくださいますよう、希望する次第でございます。

なお申しておきますが、学校という形の上の建物や諸設備は焼失いたしました。が、学校教育精神並びにその実践については、少しも変わりのないばかりでなく、不自由なる学校生活の中から、春の草木の芽を出し、根を張る如くに、生き生きと発育しつつあるのであります。これひとえに先生方の御尽力によることで、感謝に堪えません。皆様は、ますます御元気に、万難に耐えつつ、校歌の「身を鍛へ心鍛へて世の中に立ちてかひある人と生きなむ」の実現につとめていただきたいのであります。

『十文字こと先生傳』（昭和三十六年出版）より  
（\*）「こと先生年譜」、その他の資料では、渡欧は昭和四（一九二九）年の記録がある。）

## 八十過ぎて御受講

大妻 コタカ

十文字先生は、信念の人、意志の人として、私の尊敬している方の一人でした。十文字家とは、学校創立以前から親しくしていただいております。先生の夫君大元氏が自彊術を提唱され、私財を投じて盛んに国民体位向上のために尽瘁しておられましたその当時、私の亡夫は、毎朝巢鴨の道場に通ってそのお徳に接し、共鳴者の一人として自彊術の実践に努めておりました。在京の者ばかりでなく、地方人にもたくさんの方の信奉者があって、十文字氏の自彊術は、大変有名なものでした。こうした尊い運動の陰には、こと夫人の偉大な協力のあったことは申すまでもございません。

後年、学校を開かれるにおよんで、先生のお力はいよいよ顕著となり、女子教育界に大きな足跡を残されましたことは、まことに当然と申すべきでございます。

戦後、六三制の教育が布かれまして、教員資格の変更に伴う講習会が、たまたま大妻の講堂でございました時、先生は一教員として御熱心に受講されました。先生ほどの大教育家が、しかも八十歳を超えられた御高齢の御身をもって、二十代の若い方々と御一緒に、粗末な、かたい腰掛にお腰を下ろされての聴講のお姿は、ただただ感激のほかはありませんでした。急いで座布団をお進めいたしますと、「すまない、すまない。」とおっしゃりながら、長い時間をお疲れの御様子もなく、その真剣さに頭の下がるのを覚ええました。先生は、常に学び、常に研ぎつつ、一生を過ごされたお方で、私たち教育に携わるものの、よいお手本であり、よい指導者であられました。

『十文字こと先生傳』（昭和三十六年出版）より



女流教育家の集い（1950年）

前列左3人目より 吉岡弥生（現・東京女子医科大学／創立者）、川村文字（現・川村学園女子大学／創始者）、十文字こと、跡見李子（現・跡見学園女子大学／第二代校長）、大妻コタカ（現・大妻女子大学／創始者）

## 栄養士の大先輩

佐々木 理喜子

十文字先生が栄養士の大先輩である、と申し上げたら、知らない人は、ビックリなさるかもしれません。現在は、全国に栄養士養成施設が大学・短大・養成所をとりまぜて百五十余校、卒業生は一年に数千人も出ます。全く盛んな栄養時代となりました。昭和三年のころ、栄養学校は全国にただ一校、生徒は十人余り、その中に先生とクラスメートになって勉強をした数々の思い出があります。そのころ、すでに文華高等女学校の校主でいらした先生と、二十代の私どもが講義をきいたのは、小石川区駕籠町にありました国立栄養研究所の講堂でした。芝区の新宿区に校舎はありましたが、遠いので、教える先生も習う生徒も駕籠町のほうがよくて、そこに通いました。所長の佐伯矩先生以下、原徹一先生・杉本好一先生・樋口太郎先生・加藤正吉先生など、皆立派な栄養学者で、栄養学界の最尖端に立つ方々、よい講義をきき、十人余のすぐれたクラスメートを持って、私どもの栄養学への出発は、実に幸運でした。その時の卒業生が、今も全国の栄養士のトップに立っています。

先生は教育者として生徒の体育に特別の留意をされましたが、同時に栄養の必要を痛感され、世人に先んじて、五十歳の年代で再び新しく勉強をされたのは、達識の方でいらしたと、今更の如くに思います。学生としての先生は、よくノートをとられたし、多忙の中を休まずによく出席されました。講義がすむと講堂のお掃除があります。クラスで相談して十文字さんだけ免除。その代わりに、遠足の時には沢山のプレゼントをいただきし、卒業式の謝恩会には、寄付を多額に出してくださいと、何とよきクラスメートかなと思ったりしました。

ある時クラス会をして、二組に分かれて、ゼスチュアをしました。お茶目ぞろいで、『花嫁』という題が十文字さんに当たりました。白いハンケチを袂から出して頭にかぶり、キモノのつまをとって、シャナリ、シャナリと、恥ずかしそうに歩き出していらした、その満面の姿に、みんなでお腹の痛くなるほど笑いました。たのしい日でした。

研究所の先生方は、巣鴨のお宅のテニスコートへ遊びに行ったり、近くに借家まで見付けていただいたり、親切にしてくださいました。昭和二十七年の六月に、栄養士のために、栄養改善法案が国会を通過しました。嬉しかったので、昔の

同級生二人と、お知らせに学校へ伺いました。喜んでくださって、かえる時、門の前に立って、何時までも見送ってくださいましたお姿が、今も眼前にちらつきます。

『十文字」と先生傳』(昭和三十六年出版)より

## 解説・こと先生の栄養学勉学について

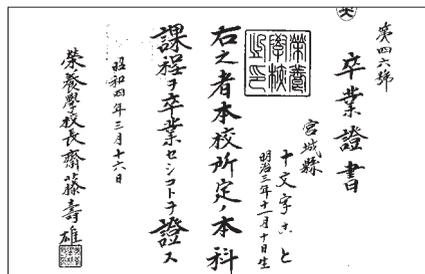
前掲の佐々木理喜子先生による追悼文「栄養士の大先輩」には、こと先生が五十歳代で、栄養学の勉強をされたことが記されているが、現在栄養学を学ぶものとして、その内容には驚かされるのが数多く述べられている。現在の栄養士・管理栄養士であれば、誰もが必ず一度は耳にする佐伯矩(さいき ただす)博士の下で、こと先生は、一九二八(昭和三年)年から一年間栄養学を学ばれている。佐々木氏は、こと先生と共に学ばれた同期生であり、卒業後は国立栄養研究所で研究をされている。

栄養学の歴史をたどると、佐伯矩博士は、世界に先駆け栄養学を自然科学の一分野の学問として独立させた人物である。博士は、一八七六(明治九年)愛媛県に生まれ、現在の岡山医大を卒業後、京都帝大で学ぶ。その後内務省伝染病研究所長・北里柴三郎博士の下で研究を始めた。一九〇四(明治三七)年に、大根から酵素など発見、脚気患者

の代謝に関する研究を行った。

翌年、北里博士他による推薦で、エール大学科学部大学院で生理学、医科学、毒物学などの研究に従う。アメリカ滞在中に博士号を授与され、現地での研究続行を熱望されていた。しかし、日本国内の脚気、国民病であった結核といった問題を憂い、日露戦争後の貧しさや、それからくる様々な歪みや不幸などを栄養学の研究によって少しでも良い方向に向けられる可能性に気づき、日本に帰国された。

帰国後、一九一四(大正三年)年に私費により栄養学研究所を開設。翌年、我が国最初の「栄養学講習会」が開かれ



栄養学校卒業証書(1929年)

た。四年後、国立栄養研究所が開設され、初代所長となる。一九二四（大正一三）年には栄養学校を創設。その二年後、初の卒業生を社会に送り出す。この時初めて「栄養士」が誕生したのである。

栄養学校創設の目的は、「正しき理論の上に立つ生活は最上の生活なり」を信条とし、科学を栄養上有効に応用する指導の適任者の養成であった。つまり、栄養士とは「栄養学を専門に学び、栄養の指導を業とする者」として始められた。こと先生はこの理論の下で始まった栄養士養成の四期生であり、五九歳で栄養学校の本科課程を修了した（写真）。すでに「自身の学校経営で大変お忙しい中、休まず通われている。先の佐々木氏の文章にもあるように、栄養学校の先生方を巣鴨のお宅のテニスコートに招かれたり、近くに借家まで見つけられたりされるなど、交流も多かった。この時栄養学校の経営は赤字が続いており、こと先生は卒業の際に多額の寄付をされている。

こと先生は、卒業後、国立栄養研究所にて研究をしはらくされた。食べることに常に配慮されていた。このように、こと先生は責任ある学校経営の立場におられた中で、さらに栄養士になられたのである。生涯をつらぬく「学び」の姿を、身をもって示されており、現在の学園発展の基礎

を、ここでも見ることができる。

その後、一九五二（昭和二七）年、栄養士のための栄養改善法案が国会を通過した際、佐々木氏はこと先生にそれを報告されている。こと先生は、栄養士の初期の段階と戦後の発展を見られ、将来性を確信されたと思われる。生涯栄養学の発展に寄与された佐伯博士にとって、こと先生は偉大なる教育者であり、栄養士であられたのではないだろうか。

佐伯芳子著 栄養学者『佐伯矩伝』玄同社 一九八六年  
財団法人国民栄養協会編著『日本栄養学史』秀潤社

一九八一年

（健康栄養学科 准教授 徳野裕子）

## 「こと先生の教え」を語る・卒業生座談会

十文字学園は一九二二年の開学からすでに九〇余年を経、もうじき一〇〇周年を迎えようとしています。創立者の十文字こと先生が亡くなられて（一九五五年没）、今年は六〇年に当たります。そこで、こと先生から直接教えを受けた卒業生の方々をお迎えして、こと先生の教えを語り、当時の学園生活での交流を振り返っていただきました。二〇一五年一月二三日、巣鴨の十文字キャンパスに集いました。（写真1・2）

参加の卒業生は、卒業年が一九四四年から一九六一年であり、戦中・戦後の大変な時期に学園生活を送った方々です。こと先生は、一九三五年（六五歳）にすべての責任を負う形で校長に就任し、私財を投じて「丘の上の白亜の校舎」と言われた新校舎を新築し、学校名を「十文字高等女学校」と改めました。その後、東京大空襲（一九四四年）で校舎を焼失。戦後復興し、新たな教育体制の中で、十文字中学校・高校の発展にむけて歩みはじめた時期でした。

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 牧野 芳江さん（一九四四年卒業）    | 小田喜美子さん（一九四七年卒業） |
| 佐野喜久子さん（一九五一年卒業）    | 安田 仁子さん（一九五一年卒業） |
| 北沢 良子さん（一九五一年卒業）    | 長井 幸子さん（一九五四年卒業） |
| 秋山 美子さん（一九五五年卒業）    | 田村 瑞穂さん（一九五五年卒業） |
| 井出 淑江さん（一九五六年卒業）    | 三浦 信子さん（一九五六年卒業） |
| 高木 則子さん（一九五七年卒業）    | 村田 恍以さん（一九五七年卒業） |
| 紺野 順子さん（一九六一年卒業・司会） |                  |



写真2 座談会の様子



写真1 座談会参加者記念写真

三時間におよぶ座談会で語られた卒業生の言葉をたどると、つぎのようなこと先生の教えとお姿が浮かんできます。

### ▲ 自彊術を毎朝生徒たちとともに ▼

こと先生はすでに七〇歳以上の年齢でしたが、十文字高等女学校校長、戦後は学園の理事長として重要な仕事をされていた。

卒業生たちが「こと先生」というと今でも鮮明に覚えているのは、やはり朝礼で自彊術をされている姿であった。毎朝行う自彊術にこと先生が参加されていたことを、多くの人が大変印象深く覚えている。

「自彊術の時に毎朝参加なさって、白の稽古着と黒の袴と一緒に自彊術をなさるので、その姿は毎朝必ず拝見しています。」

「こと先生はどんなに寒くても袴をはいて朝礼において、自彊術をなさる。それを見て、こんなお年なのに自分たちはなまけてはいけないなと思いました」

「私は（並び方が背の順で）一番後ろでしたが、こと先生が自彊術をされているのを見ていました」

など、卒業生たちは今でもこと先生のお姿を印象深く語っている。時には

「私は中学校のとき一番前で自彊術をしていたのですが、（朝礼台のこと先生から）一度注意を受けたことがございます。もうちょっとしつかり腰を曲げなさいと叱られました。それは大変記憶に残っています。」

と、直接指導をされるなど、生徒たちに伝えようとする真剣な姿がうかがえる（写真3）。注意はされたが、生徒自身、生涯の思い出深い出来事としてつい昨日のこのように語っている。



写真3 自彊術道場にて（1936年）

こと先生の葬儀の折には、生徒代表として体操部と舞踊部の10人が、自彊術を号令をかけながら行い、奉納している。「号令をかけなさい」と言われたのですが、かけたことがないので練習しました。なかなか難しく、緊張しながらやっていた覚えがあります。それで「しち」が「ひち」になっちゃうんです。——体育館で練習して、当日は台の上でやったような気がします。」

健康を目指した自彊術とこと先生の間が、十文字学園は強い絆で歴史をつなげていた。毎朝行うこと先生の自彊術の姿は、卒業生の心にも深く刻まれている。

## ◆ 毎日のお話・尊敬と親しみを感ずる交流 ◆

こと先生は毎日朝礼台に立たれ、生徒たちに折々の話をされていた。一九五五年に卒業した当時生徒会委員長をしていた生徒は、寿像の除幕式（一九五四年）祝辞の中で次のように述べている。「校長先生は毎朝お元気な姿で朝礼台に立たれ、きれいなお声で、いろいろ私どもの心得になることを話してくださいました。また四季おりおりの大事な日には、その日のいわれについて詳しくお話をくださいました。また四季おりおりの大事な日には、その日のいわれについて詳しくお話をくださいました。また四季おりおりの大事な日には、その日のいわれについて詳しくお話をくださいました。また四季おりおりの大事な日には、その日のいわれについて詳しくお話をくださいました。」（「こと傳」96ページ）との思い出があり、また「為せば成る」の話のようにけつして長い話ではなく「短い言葉ではあるのですが、毎日のお話におっしゃっていた。」と言うように、こと先生が生徒たちに送ったメッセージは十分に伝わり、その気持ちに残っている。

校長先生ではあるが、生徒たちが「尊敬」と同時に「親しみやすさ」を感じる憧れの存在でもあった。六年間休まず皆勤賞をとり、十文字が大好きという卒業生は、

「巣鴨から来ていたのですけれど、校長先生がお宅をお出になる時間がわかるのです。もう80歳位で、ゆっくりお歩きになる。その時に横に立って『校長先生、おはようございます』と言うと、『はい、おはようございます』と返してくださいました、それが楽しみです。」

この生徒は校長先生に会うこうした機会を、時々自分でつくっていたそうだ。

「袴をはいて、白足袋をはかれていらっしやる。その横へ立って（ということが）、何遍かありました。うれしかったんです。」

「引きつけるものがおありでした。だから6年間休まず通えたのです。親が選んだ学校でよかったとおもっています。宝物です。」

と、こと先生の姿と自分が育った十文字の教育環境を表現している。生徒から見れば雲の上の人でありながらも、尊敬と同時に、非常に親しみをもって生徒と接していた姿が伝わってくるエピソードである。

『こと傳』の中にある生徒が書いた文章には「――廊下でお会いして、おじぎをすると、先生は立ち止まってお辞儀をされ、背中を伸ばされて、私たちの顔をやさしいまなざしで見上げて下さるので、親しみを感じると同時にとても嬉しかった。」（「こと傳」449ページ）、「（こと）先生のお話には、多分に快いユーモアが含まれておりました。その中に『正直』『時』など、心から私たちを思っていてくださったのです。そしてそれは、あくまで命令的ではなく、いつも『おたの申します』と柔らかくおっしゃるのでした。」（「こと傳」452ページ）と、生徒たちに寄り添って言葉をかけていくこと先生の御姿がうかがえる。

### ▲ 生涯の生き方を照らす校歌―校歌のおかげで、八〇年間すごせた ▼

「身をきたえ 心きたえて 世の中に 立ちてかひある 人と生きなむ」

という学園歌は、こと先生と共に学園を創立した一人である斯波安氏の作詩である。「やはり校歌が一番身に沁みます」と、学園生活での校歌の存在は卒業生にとっては今でも大変大きく、また心に残るものであった。

「入ったときからいい校歌だなと思いました。すごく単純明快でわかりやすいなって思って。今でもそれを心に刻むと涙が出ちゃうのね。私が八〇何年健康でいられるのも 十文字に入って自彊術をして、その校歌に育まれたからとい

うのが（今の気持ちです）」

と、校歌のおかげで八〇年間過ごせたことを、現在になって振り返っている。

戦時中は動員などで十分な勉強はできなかったようだが、

「そのときの、身をきたえ心きたえて世の中に——というあの校歌が、やはり今の私につながっているのではないかと感謝しています。」

校歌がその後の人生にも大きな指針となっていてつながっていることは明らかだ。手話を通して二〇年近く耳の聞こえない人たちとの交流をつづける方は

「校歌は社会人になってからの方が涙がでますね。学生の時は体操服を着て、ブルマー履いて、毎朝毎朝歌いましたけども。今の方がしみじみ気持ちに深く浸みこんできます。」

「同窓会でも一番最後に必ず歌います。年年、自分が年取ればとるほど、歌の意味がひしひしとわかるのではないですよか。」

校歌の作詩をした当時学監であった斯波安氏は、この詩の意味について次のように語っている。「身をきたえ心きたえること即心身を鍛錬することは、生をこの世にうけた人間が当然努力せねばならぬ第一の必要条件であります。いかなることをなすにも身体が丈夫に鍛えられておらず、また意志が薄弱であるとか、真面目に努力を続けることができぬとかいうようでは、成功するものではありません。まして、世の中に出て何か事業をし出そうとか、人間の信用を得ようとか、また家庭の人となって夫を助け子供を立派に育てあげようとかいう場合に、どうしてそれが出来ましょう。」（文華女学校交友会誌「文華第1号」昭和二年三月発行）

まさに、校歌が示すことは人の生涯をつらぬくものであり、現在七〇歳代、八〇歳代の卒業生たちは、それを十分に感じ取り充実した生涯を送っているすばらしい先輩女性たちである。

## ▲白亜の殿堂・良い校舎は良い教育に▼

そして日々の学園生活を送る校舎については、次のようなこと先生の思い入れがある。一九二九年の欧米教育視察により諸外国の素晴らしい学校の教育施設を視察したこと先生は、建築・設備が整っていることは教育上大きな影響があることを痛感し、私財を投じ自分の力の及ぶ限りをつくして新たな校舎を作り上げた(写真4)。当時私学には珍しい鉄筋コンクリート3階建てであり、申請にいった文部省でも驚かれたそうである。戦前に入学した生徒たちは座談会でも「白亜の殿堂」「丘の上の女学校」と呼ばれ、憧れの的であったと語っている。

「あの時の堂々たる感じというのは(いまの建築と)ちよつと違う」

「私財を投じて、女性であれだけの校舎を建てた力、すごいなと思いました。」

「私たちが考えたのは、こと先生は偉大だった。」

と、こと先生の目指した素晴らしい教育環境に感謝している。

「――私の父は明治の生まれで女の子は女学校へ行かなくてよいと言われた頃でしたが、母がどうしても(娘を)女学校にやりたいと言って(くれました)。父が1回だけ受けさせてやると言いました。その頃は(十文字の校舎は)白亜の殿堂みたいな感じだったから憧れの的で、私が母と学校を見たとき、『わあーすごい。本当に入れるのしら』と思った」と、当時の女子生徒たちの憧れの様子がよくわかる。さらに

「入ったときは戦争中でしたが、あのころはバスケットが盛んで体育館が素晴らしかったんです。」

「体育館ができたときは感激でしたな。」の言葉に表れているように、体育館はじめ特別教室もすばらしい施設が整っていた。



写真4 戦災前の学校全景(1936年)

「素晴らしいものに恵まれて、感謝しています。講堂も体育館もすばらしかった。各教室、特別教室はすこかったです。」と体育館はじめ特別室のすばらしさをたたえている。

「白い校舎は印象に残っていますが、二年半しか勉強しませんでした」

とあるように、戦争の影響で、生徒たちは動員がはじまり、空襲で校舎は焼失した。

「自分の家が焼けたのはどこかへ行っちゃっているんです。学校が焼けたというのがすこく悲しかった。」

「あの校舎があんなふう空襲でひどくなったのは、(こと先生が)どんなにおつらかったかと思つてー」と、卒業生の心の中にも校舎への思い、そしてこと先生を思う心が強く感じられる。

## ▲ 文化的な学校行事の数々―身をきたえ・心きたえて ▼

学園生活で卒業生の記憶に残るものとして語られているのは、通常の授業とは異なる文化的な学内行事の数々である。座談会に参加した皆さんからは、御能の野村万蔵さん、文楽の方、三浦環さん、岡本かのこさん、ヘレン・ケラーさん、天皇陛下の侍従の方、障害の子供を育てる母親などの講演会、講堂ではオペラや文楽の鑑賞会、さらに能楽堂へ出向いての鑑賞会も行われていた。

「私も(在学していた)6年間にオペラをこの講堂で見たり、文楽もありました。なかなか普通には行かないようなものがすこくあったように思います」

のことばにあるように、こうした文化的な活動に親しみ、これが人間性の形成にもつながっていたことは確かである。

また学外へ出での活動として、池袋のスケートリンクでのスケート、デンマーク体操、富士登山、こと先生の別荘があった御宿での臨海学校、河口湖での夏の生活。さらにマラソンでは、学校に来て

「体操服に着替えて、それで学校から走り出すんです。明治通りをずっと行ってね、結構あるんですよ。」

7〜8人のグループで、週一回ほど、新宿の花園神社まで行き、往復をした。

「みんなマラソン。都電なんかの踏切が止まっちゃうと、数秒止まったと数えてオール時間からマイナスして、ちゃんと申告したわ。」

「私たちの時は伊勢丹の壁に触ってかえってくる」という時もあった。

またそれ以前の昭和一三年ごろには、代田橋から井の頭公園までのマラソンも行われていたようだ。また戦後には、新入生歓迎会として小石川の植物園に全校生徒が歩いて行って行ったことは長く続いてきたようだ。

このように、教室内で勉学だけでなく、「身をきたえ・心きたえて」につながる活動が積極的に行われていた。

## ◆ 十文字の教えが今に生かされる ◆

戦時中、戦後の厳しい時期をこと先生と共に学園でこのようにすごした卒業生たちは、つぎのように自分たちの生き方を振り返っている。

「時代の影響で、勉強にあまり時間は使えなかったけれど、気持ちはみんな穏やかで、困っている人がいたら助けようとか、そういう気持ちをもって人たちが多くいたのではと思うのね。どういう教育だからそうなったのかはわからないのですけれど、わりあいと皆能天気というか、じめじめしたりということはなく、明るく、そういう性格に育っていく。」

「現在でも」例えば町内会からお声がかかれば、お役に立っているかどうかかわからないですけど参加して、ちょっとでもお役に立っているかなと思えたらいいなと思って。いまでも町内会には関わっています。」

「もう後期高齢者ですけど、お年寄りのおまんじゅう配りとかしています。ちょっとでもお役に立てばいいかなどの気持ちで、お手伝いしています。」

と、高齢になった現在でも、社会との関わりをもつことを心がけておられることがよくわかります。人のために役立つこと、まさに立ちてかひある生き方を示したこと先生のご指導と十文字の教えが、卒業生たちのいまの生活に生かされ、豊

かな生き方を創っています。

こと先生、いかがでしょうか。女性も学びたい、学校がほしい、そして立ちてかいある人として社会に関わるという先生の思いは、大きな道となり、こうして素晴らしい女性たちが学び育ち、未来に続いています。私たちはこの道を世界の女性たちにつなげたいと考えています。

座談会にご参加の皆様、ありがとうございました。

この卒業生座談会報告は、当日司会を担当された  
紺野順子さんとともに、研究所の亀田温子、宮城  
道子が記録をもとにまとめたものです。

- 1995(平成7年)** 国際教育(交流)センター設置  
デ・モント・フォート・ユニバーシティ(イギリス)で夏期英語研修  
および英語英文専攻単位認定海外研修開始
- 1996(平成8年)** **十文字学園女子大学開学**〔社会情報学部社会情報学科〕  
鈴木一雄、大学初代学長に就任
- 1997(平成9年)** 認定専攻科食物栄養専攻が学位授与機構により2年制専攻科に  
認定、厚生省より4年制の栄養士養成施設に認定
- 2000(平成12年)** 十文字学園女子大学社会情報学部〔コミュニケーション学科〕開設  
留学生別科開設  
鈴木一雄、勲三等旭日中授章受章
- 2002(平成14年)** 十文字学園女子大学人間生活学部〔幼児教育学科、食物栄養学科〕開設  
十文字学園女子短期大学を十文字学園女子大学短期大学部に改称  
クイーンズ・ユニバーシティ(カナダ)で英語英文専攻単位  
認定海外研修開始
- 2003(平成15年)** 鶴木眞、十文字学園女子大学第2代・短期大学部第4代学長に就任  
十文字女子大附属幼稚園に改称  
記念ホール完成
- 2004(平成16年)** 十文字学園女子大学人間生活学部〔人間福祉学科、人間発達心理学科〕開設
- 2007(平成19年)** 宮丸凱史、十文字学園女子大学第3代・短期大学部第5代学長に就任  
人間生活学部幼児教育学科を児童幼児教育学科〔幼児教育専攻、児童教育専攻〕に改称
- 2010(平成22年)** 十文字学園女子大学大学院〔人間生活学研究科食物栄養学専攻〕開学
- 2011(平成23年)** 新〔人間生活学部〕開設  
横須賀薫、十文字学園女子大学第4代・短期大学部第6代学長に就任  
北京語言大学(中国)で海外中国語研修開始
- 2012(平成24年)** **学園創立90周年**  
短期大学部表現文化学科開設
- 2013(平成25年)** 十文字大元氏の故郷、宮城県涌谷町と相互友好協力協定を結ぶ
- 2014(平成26年)** 巢鴨キャンパス新館5階に大学も利用できる「十文字サテライト」を開設
- 2015(平成27年)** 十文字学園女子大学人間生活学部健康栄養学科、文芸文化学科開設。  
十文字学園女子大学短期大学部表現文化学科募集停止。  
十文字学園女子大学人間福祉学科に保育士指定養成施設として社会福祉・保育コースを設置。



2003年 記念ホール完成



2013年 涌谷町と協定を結ぶ

# 十文字学園の沿革

- 1922(大正11年) **文華高等女学校開校**  
(設立者：十文字こと、戸野みちゑ、ス波安)  
自彊術体操を正課とする
- 1930(昭和5年) **附属幼稚園開園**
- 1935(昭和10年) 十文字こと校長に就任
- 1937(昭和12年) **十文字高等女学校に校名改称**  
(校長：十文字こと)
- 1947(昭和22年) **十文字中学校開校**
- 1948(昭和23年) **十文字高等学校開校**
- 1951(昭和26年) 財団法人十文字高等女学校を学校法人十文字学園に組織変更  
十文字こと、藍綬褒章受章  
十文字こと、理事長に就任
- 1955(昭和30年) 十文字こと死去  
十文字良子、理事長に就任
- 1966(昭和41年) **十文字学園女子短期大学開学**  
〔家政科、幼児教育科〕  
武田一郎、初代学長に就任
- 1968(昭和43年) **十文字短大附属幼稚園開園**
- 1973(昭和48年) 学科〔初等教育学科、文学科国語国文専攻、文学科英語英文専攻〕開設
- 1974(昭和49年) 坂元彦太郎、第2代学長に就任  
家政学科を家政専攻と食物栄養専攻に分離
- 1976(昭和51年) 専攻科〔国文、英文、家政、食物栄養、幼児教育、初等教育〕開設
- 1983(昭和58年) 十文字良子、勲三等瑞宝章受章
- 1985(昭和60年) 図書館完成
- 1987(昭和62年) 理事長 十文字良子没  
十文字一夫理事長に就任
- 1989(平成元年) ノーザン・ライツ・カレッジ(カナダ)で夏期海外英語研修開始  
学科〔教養学科〕開設
- 1990(平成2年) 情報センター設置
- 1991(平成3年) 鈴木一雄、第3代学長に就任  
専攻科〔教養〕開設
- 1993(平成5年) 学位授与機構による認定専攻科食物栄養専攻を設置  
ユタ・バレイ・ステイト・カレッジ(アメリカ)で夏期海外英語研修開始



1922年 文華高等女学校開校



1966年 十文字学園女子短期大学開学

# 十文字こと先生・その生涯

## 一 女性が学べる学校をつくりたい―明治生まれの超現代女性

誕生◆一八七〇年  
(明治三年)



十文字こと先生(1870~1955)

十文字学園の創設者十文字ことは、明治三年(一八七〇年)、京都府船井郡梅田村(現京丹波町)の要職を務める父高畑清次郎、母高畑とみの長女として生まれた。時代は明治政府が誕生した直後であり、封建社会が崩れ近代社会への幕開けに当たり、社会が大きく変動した時期である。

明治五年新たな教育制度を定めた「学制」が發布され、各地に小学校が設置され小学校の就学が義務化した。また、福沢諭吉(天保五年・一八三五年―明治三四年・一九〇一年)の『学問のすすめ』が世に出たのもこの年である。これまでの身分制社会から解き放たれた新たな社会の基本を「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の言葉で表し、「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勧めて物事をよく知る者は貴人なり、無学なるものは貧人となり下人となるなり」と述べ、学ぶことの重要性による学問のすすめを説いている。学ぶ



東京女子高等師範学校卒業記念  
(明治26年 3月24日  
中列向かって左より2人目)

ことにより貴人となり、身をたてていく時代が到来したのである。

といっても、女性にとり「学ぶこと・学校に行くこと」はまだまだ遠いことであった。ことが、家から徒歩で一里ある小学校に入学したのは、病弱ゆえに七歳の時であった。厳しい山道で通学はとも大変であったが、熱心に学校に通った。しかし、ことは三年で学校を止めた。稲穂で目をつつき目が不自由になった母親に代わって、家事のすべてを一〇歳の娘が担うという家庭の事情と、女に勉強は必要ないという当時の農村の常識がそうさせたのである。そうした環境にあっても、ことは学びたいという意欲を強く持っていた。「村に学校がほしい」「私が先生になって教えたい」というこの一〇代の一人の女性の教育にかける夢が、十文字学園建学の始まりであった。

この時代、女性の教育に生涯をかけた同時代の女性に津田梅子がいる。梅子は十文字ことより六年前の一八六四年に生まれている(元治元年・一八六四年―昭和四年・一九二九年)。明治四年に岩倉使節団としてアメリカに留学し教育を受けた後帰国する。日本の女性の地位の低さや隷属的状况を改革すべく、自立できる女性になるため高等教育の道を開くことを決心し、明治三三年(一九〇〇年)に日本英学塾(現津田塾大学)を開校した。女性医師の養成の道を切り開いた吉岡弥生(明治四年・一八七一年―昭和三四年・一九五九年)は、東京女医学校(明治三三年・一九〇〇年)を設立。大正一一年(一九二二年)に女性の体育塾として二階堂体操塾を開塾した二階堂トクヨ(明治一三年・一八八〇年―昭和一六年・一九四一年)なども、女性のための学校を設立した。十文字ことも、学びたい、女性が学べる学校をつくりたいという強い意志と行動力により、女性の教育の道を切り開いたこうした素晴らしい同時代の女性の一人であった。

14歳 ◆ 一八八四年  
(明治十七年)

23歳 ◆ 一八九三年  
(明治十六年)

29歳 ◆ 一八九九年  
(明治三二年)

52歳 ◆ 一九二二年  
(大正十一年)



創立者お三方  
右より 十文字こと・  
戸野みちゑ・斯波安

ことは小学校を止め家事を担う中でも、学びたいという気持ちがあつたので、一四歳で、兄と小学校の恩師の応援を受け勉強をし、教師となる勉強をするため家を離れ、京都府立女学校に入学した。一六歳で京都府立尋常師範学校女子部に進学、さらに一九歳(明治二二年)で東京に行き、東京女子高等師範学校(現、お茶の水女子大学)に入学した。この年の高等師範学校在学者は男女合わせて一五二名に過ぎない。このような少数精鋭の教育を受け、二三歳で卒業し、卒業後は、母校の京都師範学校、さらに鹿児島県尋常師範学校などでも教鞭をとり、日本の女子教育の最前線にたつたのである。

自ら学ぶ道を切り拓き、当時の女性にとって最高レベルの教育を受け、まだ数少ない教師という専門職につくことで女性として社会に進出したことは、今でいえば社会進出したキャリアウーマンの素晴らしい大先輩ともいえる。

その後、二九歳で、東京の実業家十文字大元氏と結婚した(「素晴らしきパートナーシップ」参照)。結婚後も三二歳で私立日本女学校の教員を務めた後は、四児の母としての家庭生活と、夫の事業パートナーとしての活躍、さらに健康改善に役立つ自彊術の普及(「自彊術」参照)など社会活動に大きな役割をはたし活躍をしている。

子育ても終わった五〇歳代になり、いよいよ学校設立の夢の実現を目指した。自立した女性の教育機会を後輩の女性たちにつくりたいと、五二歳(一九二二年)のときに東京女子高等師範学校時代の学友(戸野みちゑ氏、斯波安氏)と三名で文華高等女学校を開学した。(写真)

大正デモクラシーの中で一九一一年には平塚らいてうにより文芸雑誌「青鞥」が刊行されている。この時代、女性の社会進出や学べる学校(中等教育)が少ないことが問題



校舎全景と人文字  
(昭和30年5月17日)

59歳

◆一九二九年  
(昭和四年)

65歳

◆一九三五年  
(昭和一〇年)

85歳

◆一九五五年  
(昭和三〇年)

とされ、政府の臨時教育会議は大正九年（一九二〇年）に「高等女学校令」を改正し、女子教育の改善を目指すべく高等女学校の設置を進めた時期である。

女性が学べる学校、健康な身体を作るために自彊術を正課とし、学園の建学精神は「身をきたへ、心きたへて世の中に、たちてかひある人と生きなむ」の学園歌に凝縮されている。こと先生は五九歳（一九二九年）の時、スイスで開催された「第三回世界教員会議」に出席し、私学が教育の要を担う欧米の姿を見て、改めて女子の私立学校の先頭に立つ決意を固めた。

後に六五歳（一九三五年）のとき、こと先生が一切の責任を負う形で校長に就任した。私財を投じて当時の建築技術の粋を集めた校舎新築に着手し、学校名を十文字高等女学校と改めた。東京大空襲で校舎を焼失したが復興し、戦後一九五一年に理事長に就任。自身も若い人たちとともに生涯学習にとりくんでいた。航空写真をとるために校庭で生徒たちが「十文字」の人文字を描いていたその日に、八五歳（昭和三〇年・一九五五年）の生涯を閉じたのである。

教師になりたいという女性は現代でも多いが、そのうち何人が「学校を創りたい」という大きな夢を持ち、次世代の女性たちの未来にかかわる事業を担うだろうか。五〇歳代からの人生の後半では、学校経営という社会的な使命を果たしている。女性自身が学ぶことから身を立て、次世代の女性の教育を担うべく社会的な役割を生きた生涯は、まさに、生涯に渡ってキャリアを自ら創り上げた先駆者であり、その生き方はまさに明治生まれの超現代女性であるといえる。

## 二 自彊術―身体をつくり、人をつくる

現在十文字中学・高等学校では毎朝校庭に生徒・教職員が並び、自彊術体操を行っている。大正一三年に正課として導入されて以来の学園の毎朝の行事である。

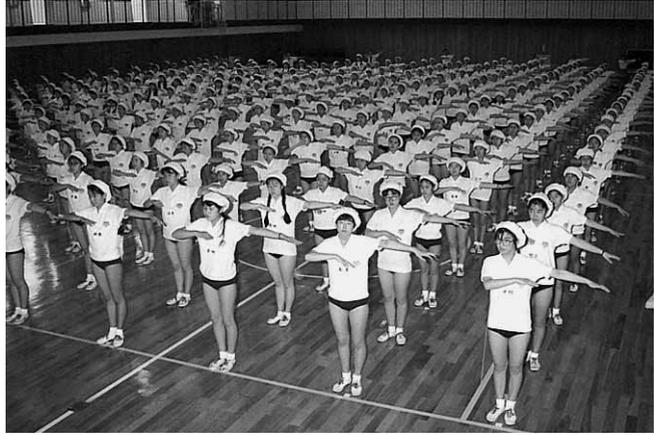
自彊術は大正五年に中井房五郎により創案された三一の動作からなる健康法である。こと先生の夫君大元氏は自身の病をこの体操で克服されたことから、その普及に大きく関わり、文部省における講演や師範学校での実演などを全国で行っていた。自ら道場を建て、女学校の生徒たちにも指導をおこなった。

自彊術の自彊の意味は、「自彊不息(じきょうやまず)」すなわち、「自らつとめてやまない」ということで、何事によらず一度大きな覚悟を持って決行した以上困難にぶつかってもやりぬくということである。こと先生が座右の銘にされていた孔子の句の中の教えに基づくものである。

いまでこそ社会で健康志向が高まっているが、当時こと先生は「心身の健康な女性を育成すること」が根本精神であり、世の中に役立つ立派な女性を育成することから「強健な体、確固たる精神と自由に活用できる精神を持たなければならない」と、自らこの体操の教師になられて、生徒を指導された。



自彊術を指導する こと先生



当時の生徒は「道場に集まると、私たちには経験のない自彊術の一挙一動を、純白なシャツに帽子をつけて、黒茶の袴も軽々しく、熱心に教えてくださる先生、それはこと先生である」と、鮮やかな印象を述べている。また第二次大戦後の占領下でGHQから集団での体操の中止を求められたとき、こと先生が健康のための体操であることを明確に話されたため、中止されることはなかったと、当時の体育教員成田寿子先生が語られている。こと先生の自彊術に対する強い思いがうかがえる。

第二代理事長十文字良子先生は「卒業する人たちは終生必ずやこの共通した心情がかよいあっているものと信じます。これが本学の歴史を貫いて流れる校風であり伝統であります。筋の通った堅実な実のある歩みをつづけているこの学園の卒業生が、校歌の通り世の中に役に立ち日本の底力となっていることに、わたしは大きな誇りを感じるのであります」と学園創設五〇周年の折に述べている。

卒業生たちは、学校生活のことで思い出す1つが、毎朝の自彊術体操であり、学校生活のなかで自彊不息（じきょうふまず）の精神で頑張れ、という言葉が聞かれたという。また自彊術を行うことが規則正しい生活の基本ともなっていた。生徒、教職員全員が毎朝あつまる自彊術体操が作り出す環境は、身体の健康のみならず、人の和をつくり、生徒たちの人間関係をつくる学園の要となる重要な役割を果たしていたといえる。

### 三 素晴らしきパートナーシップ―大元先生・こと先生

十文字学園は、教育者である十文字こと先生と、実業家である夫の十文字大元先生の素晴らしきパートナーシップにより、成り立っている。

大元先生は高い志をもって二二歳で渡米した。帰国後は、青年実業家として活躍する。いまならだれでも知っている消火器や映写機などを輸入し、普及させたのである。また「活動写真」も輸入し、大元先生自身が活弁として第1回の上映会を神田で行った記録がある。この「活動写真」という日本語をつくったのは大元先生自身であった。

先進的な実業家であり、まれにみる人格見識の高い大元先生とこと先生が結婚したのは、明治三二年、大元先生三二歳、こと先生二九歳であった。結婚後こと先生は、家庭人としての役割と同時に、事業にも大きく関わりその運営の一端を担った。また夫の大元先生が自彊術で健康を回復したことから、その普及に努める社会活動を行うなど、三〇・四〇歳代は家庭生活、事業運営、そして社会活動にと多方面で活躍をしている。

第二代理事長の十文字良子先生は、入学式のあいさつで学園創設にまつわる次のような話をされている。「会社の経営もうまくいき、夫の大元は妻に聞いたのです。妻は学校が創りたいと答えました。」と。こと先生は幼少期の志を持ち続け、学校をつくる大きな夢の実現に向かった。



十文字こと先生・大元先生

大正時代に入り女子の就学希望者が増加していた。その就学難を救済し、教育を通して健康な女性を育成するため、私立の高等女学校設立を目指した。大元先生は、常に意を国家社会におかれていたので、こと先生の女学校設立に賛意を表し、その設立の援助を快諾されたのである。

大正十一年（大元先生五五歳、こと先生五二歳）に、こと先生と東京女子高等師範学校の学友である戸野みちえ氏、斯波安氏の三名が創設者となり、文華高等女学校を開学したが、ここでは、教育にかかわるいわゆるソフットの面はこと先生たちが担い、大元先生は建築、諸設備などハード面を担当することで、学校の経営が進んだ。また自彊術の授業は、大元先生の造られた道場で活発に行われていた。まさにここでも、素晴らしいパートナースhipが発揮されている。

「学校に行きたい」「学校をつくろう」ということ先生の生涯の夢と大元先生の考えが合致し、その素晴らしきパートナースhipのもとに、心身を鍛え健康な社会に役立つ女性の教育を目指す学校が誕生した。お互いに良き家庭人であり、ビジネスパートナーでもあるという対等な関係性をもつ男女のありかたを実際に生きた先人である。これは現代の男女共同参画社会に通じるものであり、大学の校庭に並ぶ御二人の姿は、学園の象徴である。

亀田 温子（十文字こと・女性と教育研究所 教授）

# 『十文字こと先生傳』より

昭和三十六年出版

## 力の修養

十文字こと

「力」と名の付いたものには、いろいろの種類がある。大きくしては、国力・兵力・経済力等から、小さくしては、個人の精神力・体力・腕力・脚力等に至るまで、容易には数え切れない。たとえ「馬鹿力」と言われても、ないよりは増しである。それを利用すれば、個人のためにも、公共のためにも、有益な仕事がたくさんできる。持つべきものは「力」である。

ところが、これらの「力」は、まことに不思議なものである。用いれば用いるほど増加する。決して、減少することがない。ここに「力」の修養ということが、いかに大切であるかが考えられると思う。修養と言えば、堅苦しいように思われるかも知れないが、言葉を変えて言えば、修養とは、練習というのと同じである。「力」の練習といえば、親しみ易く、誰にでもできる事柄のような気がするであろう。

さて「力」の練習ということ、さらに具体的な例について見ると、一層よく了解することができる。例えば、平素は五里も歩けば疲れて動けなくなるような人でも、この五里の歩行を繰り返してある間に、疲労を感じなくなる。終わりには、五里の距離では、物足らなさを感ずるようすらなる。それは、「力」の修養、つまり「力」の練習が、十分にできるためである。七里、八里ないしは十里の距離でも、歩きつけていること、すなわち「力」の練習さえ十分にできたならば、遂には、楽々と歩くことができるのである。高い山、例えば富士山に登るにしても、最初は苦労をして、二度と再びこんな山には登るまいと思つても、翌年また、人に誘われるままに登ってみる。そうすると、案外楽に、骨を折らずに登ることができる。これならばと、また翌年、三度目の登山をすると、更に疲労を覚えなくなる。そうして、五度、十度と登っている間には、「もう少し富士山が高かったらよいがあ。」というようにまで、登山力とも称すべき「力」が増加してくる。これは、幾度も富士山に登った人の経験談であるが、この事實は、他の場合にも同じように言えると思う。すなわち、精神力でも、体力でも、学力でも、皆この「力」の練習によつて豊富にし、増加して行くことができる。しかるに、この練習をせずについて、

「自分は無力なのだ。」と思ひこんだり、また、「誰々は優秀である。」ときめてかかることは、大変な誤りである。もちろん、人は顔・形の違うように、持って生まれた性質や能力に、多少の相違は誰にもあろう。しかし、いま述べたように、「力」の練習ということによって、誰でもが、ある程度までは、何でも必ず上達進歩し得るものである。頼山陽が、かつて人に向かつて、「われを天才という者は、未だわれを十分知らない者である。われを刻苦するという者は、真に我れを知っている者である。」と言ったことがある。

「好きこそ物の上手なれ。」で、好きなものは、人に言われなくとも、自ら進んで練習をする機会も多い。そのために、自然と「力」の練習が十分にできて、上達が早いのである。

そんなわけであるから、「力」の練習、すなわち修養ということを、私たちは、常に心掛けていなければならぬ。下手なのは、下手なように刻苦勉励し、上手なのは、上手のようにそれぞれ練習するのである。また、こうして練習して得た「力」は、何時までも身についていて離れない。すなわち若い時に、ピアノをやつて相当上手になつたとする。その力が、後になつてもピアノを始める時には、自然に現われてくる。従つて、ちよつと、はじめたばかりの、駆け出しのピ

ニストなどとは違った上手さが見られる。お習字などでもそうである。相当に稽古をした人ならば、一旦中止していても、書き出せば、決して小学校の一年生のような字は書かない。機械の力などと違って、人間の身についた力、練習によつて得た力は、実に不思議な性質を持つてゐる。「力」に練習の必要なことは、これでも明らかである。

ところで、こういう不思議な「力」は、決して、一朝一夕においそれと出てくるものでもなく、つくものでもない。しかも、一朝一夕についた「力」ならば、本当に、その人の血となり、肉となつていないから、またすぐになくなつてしまふ。試験勉強などで、一夜作りで慌てて覚えた「力」が、試験場を出た途端にもうなくなつて、何も覚えていないというようなのは、平素の練習によつて得た「力」でないからである。「力」の練習、すなわち平素からの修養が大切なことは、これによつても明らかであろう。体力なども、全く同様である。平素、用心深く注意し、練習を怠らなければ、着々と元氣は旺盛になり、体力は豊富になる。自彊術などでも、毎日一、二回ずつ繰り返して、さて、その直後に、体力がどれほど良くなつたというわけのものではない。ただ、これを毎日毎日繰り返し返す間に、自然とその効果が發揮せられるのである。あたかも、五里

で疲労を覚えた人が練習の結果、十里でも更に疲労しなくなると同様である。また、この毎日毎日継続し、練習するということが、前にも述べた如く、「一事貫行」という精神力の養成にも、重大な意義を持つのである。こういう意味で、「力」の練習、すなわち「力」の修養ということ、私たちは一層考えなければならぬ、目下の時局なのである。(後略)

(昭和十四年二月十五日付、「十文字高女時報」)

## 回顧二十年

### 十文字こと

本校の創立は、大正十一年二月十五日であった。十一年一昔というから、ちょうど二十年二昔を、今日まで順調に成長して来たのである。人間ならば、二十歳の青年に達したから、すべてに對して、一層熟識をもつて自治的に自発的に行動しなければならぬ時となったのである。

二昔以前、すなわち大正十一年ごろを回顧すると、当時女学校の卒業生に對して、「一向役に立たない。」というような芳しからぬ批評が、一般に流布していた。世評を一々そのまま信ずる必要はないけれども、それを聞いたたびに、私もいろいろと考えた。どうかして、

本当に世の中に役立つ、有用な、立派な日本婦人を作り上げよう。婦人こそ、将来は子供たちの母として、日本民族性や、日本民族文化や、日本民族精神を、次の時代へ伝えてくれる大切な教育者である。それには、強健な身体と、確固たる精神と、自由に活用できる知識とを目標として、若い女性を教育し練成する必要がある。

このようなことをいろいろ考えた結果が、本校の創立となった次第であった。それ故に、本校の校歌は、右のような意味を要約して、次の如く歌ったのである。

身を鍛へ心鍛へて世の中に

立ちてかひある人と生きなむ

この鍛錬は、一朝一夕にできあがるものではない。日常生活それ自身が鍛錬でなければ、十分な結果は到底望まれない。(中略)

本校が、毎日、自強術を職員・生徒全員合同で実行し、つづいて歩行若しくは駆け足をやっているのも、その鍛錬の一つである。暑い時には別に感じないが、酷寒の時には、体操着一枚では相当に身にこたえる。けれども、寒暑を論ぜず、毎日の鍛錬によって風邪にかかる者もない。のみならず、自強術のためには、早朝登校しなければならぬ。従って起床もまたそれ

だけ早くなる。早起きが身体に及ぼす影響は言うまでもないが、冬の寒い朝などに三十分だけでも早く起きるためには、意志を強固にして寒気を克服しなければならぬ。それには、大切な精神の鍛錬が伴うから、保健上と精神上との両得が、一挙にしてあげられることとなる。(中略)

諺に、「鉄は赤く熱せられた時に打て。」と言うが如く、人間の鍛錬にも自ら時機がある。若い時ほどよい。すなわち少年・少女時代の鍛錬が、最も有効である。また鍛錬はすればするほど、身体を強健にし、同時に精神をも確固たるものとする。(中略)

次に、「心鍛へて」についても、身体と同様、日常生活の間の鍛錬が大切なことは、いうまでもない。物事は、必ず、最後までやり通すことを怠ってはならぬ。一事貫行と、常にいうように、着手したら、継続的に実行する。「一日暖めて十日冷やす。」という言葉があるが、このようにしては、何事も完遂するものではない。ここに、克己心や勇氣や忍耐が必要となるが、それは外から持つて来ることのできない精神である。どうしても自分みずから、内に建設して行かなければ、身に着かない。そういう点から見ると、人間はいつに

なっても完成したという時はなく、常に、「完成せられつつある。」という動的な考えの下に鍛錬を続けなければならぬことになる。学校を卒業しても、人間完成への道程は、ずっと先へ継続せられていると、何人も考えておくべきものである。

最後に知識のことを述べよう。知識が、そのまま活用せられないで、頭の中にしまいこまれていてはならない。知識は、常に腹の中に整理しておいて、必要な時は、日常生活のいかなる場合にも、十分に実地に活用できなければ、何の価値もない。のみならず、知識は、活用しないと自然に消えてなくなる心配がある。知識の実地活用が、いわば知識の鍛錬である。鍛錬せられた知識が腹の中に整理せられていけば、その輝きは眼の中に美しく現われてくる。

かくして、校歌に示すような、国家に有用な日本婦人が教育せられるのである。このような婦人を、ぜひ、教育しなくてはならないと、私は堅く信じている。

(後略)

(昭和十七年二月十五日)

# 学 園 歌

斯波 安 作詩

島崎赤太郎 作曲

*mp*  
み を き た へ こ こ ー る き  
*V*  
た へ て よ の ー な ー か ー に た ー ち ー て か ひ  
*f*  
あ ー る ひ と と い き な ー む

## 建学の柱、校歌の制定

校歌は学監斯波安により作詞され、東京音楽学校教授島崎赤太郎が作曲し、晴れの開校式（1922年、大正11年）で披露された。

『身を鍛へ心きたへて世の中に

立ちてかひある人と生きなむ』

という詞について斯波安は「身を鍛え心を鍛えること即心身を鍛錬することは、生をこの世にうけた人間が当然努力せねばならぬ第一の必要条件であります。いかなることをなすにも身体が丈夫に鍛えられておらず、また意志が薄弱であるとか、真面目に努力を続けることが出来ぬとかいうようでは、成功するものではありません。まして世の中に出て何か事業をし出そうとか、人の信用を得ようとか、また家庭の人となって夫を助け子供を立派に育て上げようとかいう場合に、どうしてそれが出来ましょう。」と文華高等女学校校友会誌「文華」第1号（昭和2年3月発行）の中で説いている。（『十文字学園70年史』より）

学園歌「身をきたへ 心きたへて世の中に

立ちてかひある人と生きなむ」について

学園歌の最後の部分「生きなむ」については、次のような解釈があります。1つは、指導者が学生に呼びかけて、そうあってほしいと希望する意味です。もう1つは、学生がこうあろうと自分の意志・決定を歌っている意味にとれます。文法上、2つの意味のどちらととらえることも可能であり、そこに学園創設者の強い願いが込められていることは確かです。

## 編集後記

---

「十文字こと・女性と教育研究所」は2011年に開設しましたが、それ以前の「女性と情報研究センター」と合わせると10年以上にわたる活動を展開してきました。社会情報学部の卒業生1－8期生のその後を追った「卒業生調査」の実施・報告を2009年に行い、また2009年から「建学理念作文コンクール」を開始し、今年は第7回を実施しました。女性が活躍する社会をめざして様々な講演会なども開催しています。

私学にとって設立者の建学理念を学ぶことは重要であり、関連の授業支援ともなるこうした冊子を作成することも、大きな役割であったと思われます。この研究所は学内の再編に伴い研究期間終了となります。これまで多くの方にご協力いただいたことに改めて感謝いたします。

2015年は「こと先生 没後60年」、2022年には学園100周年を迎えます。これからの益々の発展につなげたいものです。

研究所研究員（2015年）

小林直美（生活情報学科、2015年9月から山形大学に転出）、近藤秀二（広報部）、角田真二（人間福祉学科）、津吹 卓（児童教育学科）、徳野裕子（健康栄養学科）、宮城道子（人間福祉学科）、山田陽子（幼児教育学科）、亀田温子（研究所）、内田伸子（客員研究員）、橋本ヒロ子（客員研究員）

---

十文字学園創立者 十文字 こと

### 夢の実現から未来へ

— 没後60年記念 —

2016年3月 発行  
2017年3月 第2版

---

発行・編集 十文字学園女子大学 十文字こと・女性と教育研究所  
〒352-8510  
埼玉県新座市菅沢2-1-28  
電話(048)477-0555 FAX(048)478-9367

---



2017.3